

巻頭言

かつて東大駒場キャンパスの八号館に、機動力の高い教養学科図書室があったことを覚えている会員は多いことと思う。いまやそのすべての図書は駒場図書館の地下書庫に統合されてしまったが、かつての教養学科図書室は小さくて寒暖の厳しい(！)環境であっても、密度の高い使い勝手の良い図書室だった。

私立大学から修士課程で駒場に来た私にとって、そこで初めて目にする充実した図書群は何よりの喜びだった。とりわけ当時嬉しくて覚えているのは、ヨンストン Johannes Jonston (一六〇三~一七五五年)の『動物図譜』*Historiae Naturalis* (二六五七年)の原書や松本峻介(一九二二~一九八八年)の画集、木下李太郎(一八八五~一九四五年)の『食後の唄』(一九一九年十二月)の複製本などである。それから世の中には、過去の雑誌の複製本というものがあると知ったのも駒場に來てからである。複製版『ミノートル』*Minotaur* (Ripr. Ed. Genève: Editions d'Art A. Skira, c.1981)は、確か教養学部図書館で見し

雑誌が拓く学際研究

今橋 映子

て感激したし、教養学科図書室には第一次『明星』(臨川書店一九六四年九月)や、『方寸』(三彩社、一九七三年二月)の立派な複製版が収められていた。

そうした書架の間を彷徨っていたときに、なぜかいつも気になっていたのは、『美術新報』全十二巻(全三百九十八号)の複製本(八木書店、一九八三年一月)である。ほぼA3縦型の大きさだから書棚の一段は完全に占有する量で、立派な装幀も目を引いた。今考えると、私が入学した当時はこの本も出版されて間もない時期であり、出版と同時に購入されたりしく、手に取ってみるといつも新品で、とりわけそれを使って継続的に研究している人も少ない感じがした。と同時に、明治大正期に出版された美術雑誌にしては、セザンヌやゴッホ、マネやマチスなど当時前衛とされた画家たちが中心的話題になっているわけでもなく、やたらに「彙報」欄の記事が多い印象で、当時の画壇の情報誌のような存在なのかなあと、興味と違和感の双方を抱いて書棚から離れるのが常であった。

それから約二十年の時を経て、美術批評家・岩村透(一八七〇~一九一七年)の研究を本格化させるにあたり、雑誌『美術新報』が、図らずも圧倒的な存在感をもって私の前に再びあらわれた。この雑誌が一九八〇年代にすでに完全複製されたこと、しかもそれを駒場に即座に購入された先人たちの先見の明に、頭が下がる思いを何度抱いたか知れない。それくらい、明治大正期の美術界を新たに読み解く

東大比較文學會 編輯

CD-ROM版

# 比較文學研究

Windows版

一九五四年(第一号)~一九九一年(第六十号)

東京大学比較文學會の機関誌『比較文學研究』は、一九五四年に創刊されてから今日に至るまで、日本における比較文學・比較文化研究をリードし続けてきた。二〇一五年六月には第百号を刊行するに至った。

比較文學・比較文化研究の基本文献の宝庫ともいえるべき同誌であるが、現在では旧号を入手することは極めて困難であり、また完全に揃えて所蔵している機関も少なく、研究の便は著しく妨げられている。

本企画は、東大比較文學會の全面的な協力により、創刊号から第六十号までを鮮明なデジタル画像で提供するものである。

第I期 第1号~第20号  
(1954~1971)  
ISBN978-4-7954-0305-5

第II期 第21号~第40号  
(1972~1981)  
ISBN978-4-7954-0306-2

第III期 第41号~第60号  
(1982~1991)  
ISBN978-4-7954-0307-9

各期CD-ROM 2枚組  
総11,500頁  
定価[各期](本体78,000円+税)

- 本資料の主な特色
- 比較文學・比較文化研究に必須の基本誌を創刊号から第六十号まで三期に分け完全複製
  - 謄写版印刷で限定刊行された、幻の第一号、第二号も完全収録
  - 各期(二十号)約三八〇〇頁のデジタル画像をCD-ROM 二枚に収録
  - 各期ごとに詳細目次を付し、執筆者検索が可能
  - 紙文書と同様の操作性をもつ画像検索表示ソフトを搭載

在庫僅少

【推奨動作環境】  
CPU: Celeron 500MHz以上  
メモリ: 256MB以上  
HDD空き容量300MB以上  
OS: Windows 7~10対応

金子兜太主宰

## 『海程』電子版

(DVD)

現代俳句の表現世界を前衛として牽引し、日本の詩歌文學に大きなインパクトを与え続ける俳誌『海程』を電子化し汎用性の高いPDF形式で刊行!!

既刊: 第一期第1巻(約3400頁)  
(創刊号「1962」) 第58号「1999」  
ISBN978-4-7954-0421-2

巻数	収録号数・刊行年・頁数	予定価格
第I期		
第1巻	創刊号(1962)~58号(1969) 約3400頁	定価 (本体30,000円+税)
第2巻	59号(1970)~108号(1974) 約3700頁	予価 (本体30,000円+税)
第3巻	109号(1975)~158号(1979) 約3800頁	予価 (本体30,000円+税)
第4巻	159号(1980)~208号(1984) 約4500頁	予価 (本体30,000円+税)
第5巻	209号(1985)~258号(1989) 約5600頁	予価 (本体30,000円+税)

※価格・各巻の内容構成と頁数は仮のもの  
で変更する場合があります

分売いたします。詳細リーフレットがご入用の方は下記にご連絡ください。

すすざわ書店 埼玉県川越市脇田本町26-1-306 TEL:049-293-6031 FAX:049-247-3012

鍵がこの雑誌には詰まっていたのである。

『美術新報』は、一九〇二年三月に画報社によって創刊された。編集主幹は小原大衛および石橋望雲（いずれも生歿年不詳）。当時東京美術学校教授となっていた岩村透もその創刊に賛同して盛んに執筆したが、外遊などもあって二年ほどで離れた。「新聞の切り抜き」という悪口を、『方寸』の若い世代に叩かれたのもこの時期である。経営不振に危機感をもった画報社は、岩村透にその立て直しを依頼。岩村は、雑誌編集者としての敏腕と、何よりも社会改良運動に深い志をもった坂井犀水（一八七二—一九四〇年）を編集長として招き、一九〇九年十月に大改革を行った。それ以降、一九一五年十二月までのわずか数年ではあったが、「当時の美術雑誌中の白眉」と同時代に評される黄金時代を迎えるのである。

もちろん『美術新報』の第一の強みは、その情報ネットワークを活かして、同時代国内外美術界、画壇などの情報を「彙報」欄で全て網羅するという点であろう（特に国内情報に強い）。それは改革後も変わらぬ方針であり、おそらく二十世紀の今日でも、美術史家の多くは、『美術新報』をそうした情報の宝庫としてまずは頼りにしているであろう。しかしこの雑誌を「情報誌としてのツール」ではなく、それ自体を対象として徹底的に解析してみると、実は岩村と坂井の何よりの目的は、美術と社会を結ぶ雑誌を作りたいということであったことが、俄に明らかになってくる。

読者でもあった美術家たちの動向や近況をつぶさに伝え、果ては彼らの似顔絵や「道楽一覽」（アンケート）を掲載して愉しむなど、あたかも同人誌的な感興も失わなかった点である。こうした美術雑誌のあり方は、これまでほとんど知られていなかったであろう。

岩村透の美術批評が社会といかなる関係にあったかを問う、四半世紀に及ぶ研究から開けてきた視界から、私は『美術新報』に対する見方もまったく変えざるを得なくなつた。そして雑誌研究は自ずと「学際研究」の醍醐味と困難の双方を含むということも、『美術新報』が具体的に教えてくれるに至つたのである。

先ず、『美術新報』の「全巻通読」を可能にするのは、復刻本およびデジタル・データベースの完備が前提にある。それには書誌学およびデジタル・アーカイブ学の協力が必須である。日本近代美術雑誌ではおそらく『美術新報』のみが、原誌—総目録—復刻本—デジタル版（DVD-ROM、八木書店、二〇〇三年八月。現在は有料データベース）の全てを完備した存在であろう。とりわけ復刻版別巻の総目録（八木書店一九八五年一月）には、中島理壽氏（一九四四年生）による美術書誌学の見識が十全に活かされ、それが後のデジタル版にも活かしている。（書誌学の見地から設定された）キーワード一つで、彙報欄をも含む全記事の関係箇所が明示されるシステムは、研究の利便性をどれほど高めているか分からない。

岩村透自身が、ジョン・ラスキン（John Ruskin）（一八一九—一九〇〇年）やウィリアム・モリス（William Morris）（一八三四—一九〇六年）の深い影響を受け、彼らを日本に紹介する最初期の仕事を為している。当時、いまだ洋画家たちが社会的存在意義を認められず、例えば藤島武二（一八六七—一九四三年）のような画家であっても、洋画だけでは「食えなかつた」時代にあつて、岩村は、和洋折衷の生活様式を取り始めた「一般人士」（一般市民の中に、いかに洋画を根付かせるのかを真剣に模索した。「新進作家小品展覧会」（バーナード・リーチ Richard Leach）（一八八七—一九七九年）と富本憲吉（一八八六—一九六三年）が会場造作担当）を雑誌編集部自らで催したり、生活に親しい「小芸術」（工芸品、絵葉書、本の装幀など）の質を高める運動をしたり、あるいは美術家にも一般人士にも必要な情報を最大限集めた『日本美術年鑑』（第一—三巻、明治四十三年度—大正元年度、画報社）を史上初めて刊行したりした。雑誌記事と周辺事業は、このように一体となつて進行したのである。また岩村と坂井は、『美術新報』の社説にあたる「時言」欄を活用して、美術行政や美術業界、美術教育などの現状分析、苦言、提言、施策案など、現代で呼ぶところの文化行政やアーツ・マネジメンツ的な視点を次々と提示し、美術家と一般市民の双方に然るべき「輿論」をおこそうともしていた。

『美術新報』がさらに興味深いのは、そうした戦略的な運動を行う傍らで、この雑誌への寄稿者、協力者、そして

次に、比較文学研究が雑誌分析に即座に有効性を発する見地が、海外雑誌との関係性である。この数年私は密かに、『美術新報』を「日本の『ステューディオ』と呼んできた。『ステューディオ』Studio: an Illustrated Magazine of Fine and Applied Art（一八九三—一九四四年）は、世紀末ロンドンで創刊された美術雑誌。美術史的にはビーズレー（Audrey Beardsley）（一八七二—一九〇八年）を世に押し出し、アーツ・アンド・クラフツ運動を支援した。（美術）の概念を絵画彫刻から装飾美術や建築にまで押し広げ、ロシアの『芸術世界』（*Mir Iskusstva*）やドイツの『パン』（*Pan*）など、ヨーロッパ各地の美術雑誌に多大な影響を及ぼしたことで知られる。またジャポニスム関連の重要な記事も多く掲載された。日本ではとりわけ夏目漱石（一八六七—一九一六年）が愛読していた雑誌と言えは思い出される方も多いだろう。若いときに長く米・仏留学経験があり、英語と日本語のバイリンガルに近かつた岩村透は、膨大な種類の海外新聞や文学・美術雑誌を私費で購入していた。中でも『ステューディオ』初代編集長のグリーンソン・ホワイト（Joseph Gleason White）（一八五二—一九〇八年）の人柄と業績には深く傾倒しており、まさにこのような雑誌を作ることが夢だったのである。実際『美術新報』には、『ステューディオ』の記事からの引用、翻訳が散見されるだけでなく、装飾美術や建築に至る分野を重視するその方針自体が引き継がれたと見られるのである。さて雑誌研究の学際性を考えるとき、第三に重要なのは

比較文化論的、とりわけジャンル横断的な視点である。まずは雑誌研究の根底に、法制史、とりわけ出版検閲制度の知見が必須である。『美術新報』は一九〇九年に岩村と坂井が改革を行ったが、これは大逆事件の直前に当たり、その影響を直接間接に受けていた。彼らが社説「時言」にどのようによその主張を盛り込んだかは、検閲制度からの分析が必須である。そして美術雑誌でありながら、同時代の思想系雑誌と深い関係を持っていたことも重要である。というのも坂井犀水自身が、それ以前に内村鑑三（二八六—一九三〇）年の『東京独立雑誌』の編集長を経験し、初期社会主義の根拠地であった『平民新聞』の執筆者、そしてユニテリアン系の思想雑誌『六合雑誌』の寄稿者でもあった。『美術と社会』という視座自体が、こうした同時代の自由主義思潮の中にあつたことを理解しなければ、皮相的な『美術雑誌』という見方から脱出出来ないであろう。そして『美術新報』に限って言えば、ジャンル横断的な視座として、建築史学の知見をも必要としている。ラスキンに深く傾倒した岩村は、美術を建築の一部として捉え、建築家との協働作業を積極的に行い、雑誌にもまた中條精一郎（一八六八—一九三六年）や古宇田實（一八七九—一九五五年）、岡田信一郎（一八八三—一九三三年）のような当時最先端にいた建築家の寄稿を要請した。その意図する裏には、美術界と建築界が急速に接近した明治大正期の文化状況が緊密に絡んでいるのである。

雑誌研究の第四に必要なのは（これがむしろ最初に来るべきかもしれないが）、出版史と印刷史の知識であることは言うまでもない。岩村透はイギリスで一九一四年に出版された『カラー』(Colour) (一九一四—一九三三年) という新刊雑誌を現地で手に取り、その印刷技術に驚いたと日本に書き送っている。坂井犀水編集長は、『美術新報』所載の全ての図版の印刷方法を目次に明記している。それは新技術であることを知らせる目的があつたと思われる一方で、百年後の私たちに与っては印刷方法の変遷を知る重要な手がかりともなっている。

こうして、教養学科図書室で若いときに出会った『美術新報』がいかに豊潤な世界であるかを知るまでに、私は四半世紀の時を費やすに至った。もちろん、複製本やデジタル版テキストでは絶対に味わえないものが原誌にはある。それは何よりもカラー図版の質の確認である。百年の時が経って劣化は免れないとはいえ、やはり美術雑誌ならではの、原誌に挿入された別刷図版には、印刷に傾けた編集部職の繊細な心遣いが痛いほど感じられる。結局、「モノ」であることの貴重性を私たちは忘れることができないだろう。だからこそ、そうでなくとも劣化の激しい明治大正期の「印刷物」を、次の百年に向けてどのように物理的に遺していくのか、今度は文書保存学の知識と、「なぜ遺さねばならないか」を説明し得る私たち学際研究の専門家の知見が

融合することが大切だと思ふ。

そして最後にいつも感ずるのは、雑誌研究に必須とは言え、一人の研究者がこれだけの領域を跨いで学際研究を続けることの困難である。それだけに、地道な調査研究を長期間続けた末に見えてくる、まったく思いもしなかった風景に苦勞が報われる思いも格別であろう。明治大正期の美術界に限って言っても、いまだに全貌を「解読」されていない雑誌はまだまだ沢山ある。個人作家の作品研究とはまた違って、文化研究の新地平を開く雑誌研究に若い知性が斬り込んでいくことを、一人の研究者として楽しみに待ちたい。

## 編輯後記

◎ 比較研究の知見を活かした出版史研究を志して十数年。この試みを始めた当初は雑誌を文化的産物として扱った論考は少なく、新しい研究の可能性に身震いするとともに大海原に漕ぎ出した小舟のような心細さも感じたものだったが、気がつくといつのまにかそうした研究が様々な領域でぼつぼつと見られるようになっていた。今回、「同志」とともに特輯をまとめることが出来て嬉しく思う。

◎ 特輯には、駒場の現役の教員と博士論文完成を間近に控えた院生の論文を集めた。展覧会図録評も期せずして文芸雑誌『めざまし草』にちなむもの。印刷技術の発展により出版文化が発達した十九世紀から二十世紀初頭の日仏の事例を扱った論考を読みながら、比較研究・学際研究としての雑誌研究・出版研究の豊饒な可能性を感じ取っていただけなら幸いである。

◎ これら若手・中堅の論文に加え、川本皓嗣氏、菅原克也氏、古田島洋介氏らベテラン勢による論考も取めることができた。それぞれ目的も性質も異なる文章だが、いずれも我々が今後研究を進めていくうえで示唆に富む提言を含んでいる。

◎ また、故加藤アイリーン氏の新作能の翻訳を、氏と親交のあつた平川祐弘氏および訳者である大久保直幹氏による解説とともに収めた。世代を超えて関係者の活動を知ることができるよう、学術誌でありながら同人誌的な性質も持ち合わせている本誌の良さであろう。

◎ この他、博士論文三点の審査結果要旨と傍聴記を取めた。駒場では毎年力の籠もつた博士論文が世に出されているのだが、紙幅の関係ですぐには掲載できないのが心苦しい限りである。昨今のメディア状況を考えると、公表形態を再考すべき時期に来ているのかもしれない。

◎ 出版文化を研究しているとは言え、編輯作業は全くの素人、本号の刊行が遅れたのには様々な事情があるが、私自身の不慣れによるところが大きい。執筆者および読者の皆様にご心より詫言を申し上げます。編輯作業にご助言・ご協力下さった関係者各位に深謝しつつ、ここに第百五号をお届けする。

(前島志保)

## 比較文學研究

第百五号

二〇一九年十二月二十五日

編輯 東大比較文學會

東京都目黒区駒場三十八-1

東京大学大学院総合文化

研究科超域文化科学専攻

比較文學比較文化研究室

電話〇三五四五四 六三三〇

振替口座〇二六〇七七一七六八

東大比較文學會

會長 菅原克也

編輯委員

杉田英明 エリス俊子

古田島洋介 今橋映子

徳盛 誠 寺田寅彦

佐藤 光 前島志保

堀江 秀史

英文校閲 ジョン・ボチャラー

発行所 株式会社 ずさわ書店

埼玉県川越市脇田本町二六-1三〇六

電話〇四九(二五三)六〇三二

フアンミリ〇四九(二四七)三〇二二

振替口座〇一三〇一九一三八三五四

ISBN978-4-7954-0366-6 C3390

©Todal Hikaku-Bungaku-Kai 2019

Printed in Japan

# 比較文學研究

特輯 雑誌研究の現在

[巻頭言] 雑誌が拓く学際研究……………今橋 映子 (1)

第二期『新小説』における文学と絵画

——口絵・挿絵の戦略と羈絆……………出口 智之 (6)

「婦人雑誌」の誕生と出版の大衆化……………前島 志保 (27)

『ギイ・ド・モーパッサン短編選集』と現代書物愛好家協会……………寺田 寅彦 (49)

「イメージによる美術批評」の誕生

——サロン戯画の成立に関する社会的状況を中心に……………井口 俊 (65)

掛詞と縁語を見直す——和歌の比較詩学……………川本 皓嗣 (86)

断章取義とテンプレート

——H. D. ハルトゥーニアン氏の柳田國男論……………菅原 克也 (102)

*Nefertiti: A Noh Play of the Third Category*……………Eileen Kato (11)

加藤アイリーン作『ネフェルティティ』——能 三番目物……………大久保直幹訳 (116)

『ネフェルティティ』に寄せて……………大久保直幹 (134)

加藤アイリーンさん (1932-2008年)……………平川 祐弘 (136)

[展覧会カタログ評]

「明治文壇観測——鷗外と慶応3年生まれの文人たち」展……………飛田 英伸 (139)

[Le Rond-Point]

訓読愚見……………古田島洋介 (143)

金成恩氏博士論文「19世紀東アジア宣教における翻訳と

啓蒙——韓日比較を中心に」審査結果の要旨……………齋藤 希史 (148)

金成恩氏博士論文公開審査傍聴記……………佐藤 温 (150)

金志映氏博士論文「戦後日本の文学空間における「アメリカ」

——占領から文化冷戦の時代へ」審査結果の要旨……………菅原 克也 (154)

金志映氏博士論文公開審査傍聴記……………西田 桐子 (157)

林久美子氏博士論文「世紀転換期における日仏文化

交渉史 (1890-1920年代)——フランス美術行政

にみる日本美術観を中心に」審査結果の要旨……………今橋 映子 (162)

林久美子氏博士論文公開審査傍聴記……………松枝 佳奈 (165)

外国語要約…………… (1)

105

東大比較文學會